

地質59 大正大噴火の教訓を後世に伝えたい

地質担当 若松 斉昭

今年、桜島の大正大噴火から110年の節目の年です。この噴火は、1914（大正3）年1月12日の午前10時頃に発生し、同日夕方に起きた地震による被害を含めると、58名の死者・行方不明者を出しました。噴火や被害の様子は写真や活動写真（動画）に記録され、油絵やスケッチにも描かれました。しかしその多くは、太平洋戦争の戦火や混乱によって焼失・散逸してしまいました。そのような中、噴火の様子や被害、住民の移住や災害復旧工事などを記念して建立された石碑は、戦火にも燃えることなく、当時の人々の様子や想いを後世に伝えてくれています。

“科学不信”の碑

東桜島小学校の敷地内にある「櫻島爆発記念碑」は、“科学不信”の碑として有名です。その碑文には次のように記されています。「爆発の数日前から地震がたびたびおこり、海岸では熱湯が湧き出し、火口から白い煙が上がるなど、異常な現象が続いていた。村長は、数回測候所（气象台）に判断を求めたが、測候所は大きな噴火はしないと答えていた。村長は住民に慌てて避難する必要はないと説得したが、まもなく大噴火がおこり、測候所を信頼していた人々はおかえって被害にあった。桜島の大爆発は、これまでの歴史に照らしてみても、必ず起こることは当然のことであり、のがれることはできない。だから、住民はいろいろな情報に惑わされず（原文：住民ハ理論ニ信頼セズ）、異変を感じたときは、一刻も早く避難の用意をすることが最も大切であり、日頃から質素儉約につとめ、いつどんな災害があっても困らぬよう心構えをしておかなければならない。」（現代語訳より一部抜粋）



櫻島爆発記念碑
（東桜島小学校）

現在のように科学が進歩しても、火山の噴火を正確に予知することは困難です。この碑は、科学のみに頼ることなく、住民自らが自然に目を向け、常日頃からその変化に敏感であるように戒めているのではないのでしょうか。

地震学者「今村明恒」の想い

地震学者の今村明恒は、1870年に鹿児島市に生まれました。過去の地震の記録をもとに、近く東京で大地震が発生すると主張しましたが、学者たちから「ホラ吹きは今村」と中傷されてしまいます。ところが実際、1923（大正12）年9月1日に関東大地震が発生し、その警告が現実のものとなりました。明恒は、関東大地震を予言した研究者として「地震の神様」と讃えられるようになりました。後年、津波被害を防ぐには小学校時代からの教育が重要と考えて、逸話『稲むらの火』の国定教科書への収載を訴えました。

今村は、故郷鹿児島で起こった大正大噴火の被害に心を痛め、鹿児島市が建立した爆発記念碑の碑文を創案しました。噴火の経緯などが詳しく書かれた碑文の最後には、以下のように記されています。「これ（大正大噴火）を安永天明の噴火に比べるとその現象は、大差ないように感じる。そうであるなら、専門家があらかじめ、桜島の状態を観測考察し、かつての事例を有識者や旧記に照らして変化前兆を検討できれば、今後の災異をおそらく予知でき、被害が幾分軽減されるのではないかと考える。100年後またこのような爆発が起きないとも限らない。そこでこの災害の概況をここに記して、いつまでも忘れ去られることが無いように伝えておく。願わくは、今回罹災された方々をお悔やみするとともに、後世へ永く語り継ぎ、未来の惨禍を軽減することに役立つように。」（現代語訳より一部抜粋）



櫻島爆発記念碑
（照国公園）

今村は、100年後の鹿児島に住む今の私たちに宛てたメッセージを石碑に残したのです。

「歴史は繰り返す」と言われるように、地震や火山噴火は周期的に起こることが知られています。大正大噴火から110年経った今、いずれ来るであろう大噴火に備えて、先人たちの言葉に耳を傾けるべきだと思います。